

<動向> 『高尾山薬王院文書』 第二巻の刊行

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

43

(開始ページ / Start Page)

124

(終了ページ / End Page)

125

(発行年 / Year)

1991-03-24

『高尾山薬王院文書』第二巻の刊行

高尾山薬王院文書の第二巻は、第一巻に引き続き、末寺関係、寺院行事関係、信仰関係の三項目の文書を収録することにした。

先に刊行した「文書目録」によると、薬王院においては末寺関係が五七六点、寺院行事関係が五二点、信仰関係が一〇七点を所蔵している。この度の二巻には、その中から寛永九年（一六三二）から明治一三年（一八八〇）に至る文書のうち、年末詳を含めて一六三点、寺院行事関係は天和三年（一六八三）から安政四年（一八五七）に至る間で年末詳を含めて二四点、信仰関係は寛政二年（一七九〇）から明治二三年（一八九〇）に至る間で年末詳を含めて二八点、合わせて二一五点を選択収録している。

高尾山薬王院は、慶安元年（一六四八）に寺領朱印高七五石が確定したが、やがて本末制度が確立されていくと一七か寺の門末寺院による、薬王院を本寺とする末寺関係が成立した。門末寺院は現在の東京都八王子市に九か寺、神奈川県城山町に四か寺、神奈川県相模原市に三か寺、東京都町田市に一か寺が分布している。これらの末寺関係の文書の内容は多様であり、本寺薬王院を

中心とした本末関係と共に、組寺・隣寺の名称によって独自の地域的な結合がみられ、また、各門末寺院は村方在住の檀家の世話人・惣代を通して地域社会と密接な関係にあったといえるのである。この点から、本末関係については、本末組織の形成過程を示す文書、新末寺や寺格に関する文書、談林と会下の門末寺院に関する文書、本寺（薬王院）と末寺・門徒及びその関連を示す文書、江戸幕府や明治政府などと末寺の関係を示す文書、住職の就任・交代や無住寺に関する文書、寺院境内における一件や寺院と檀家・村方との関係を示す文書などに分類することができる。

寺院行事関係においては、弘法大師八五〇年忌、九〇〇年忌、九五〇年忌、一〇〇〇年忌法会についての関係文書を中心に、報恩講、花水供料寄付状、法事出席依頼、追福法要などに分けることができる。また、信仰関係は護摩講、護摩祈禱、護摩供修行、護摩料奉納、護摩札などを中心に開帳類や講衆連名帳、寄付状などの関連文書が収録されている。

このように第二巻においては、三項目の文書を収録したが、形

式や配列については第一巻に準じ、また、一点ごとに標題を掲げると共に、巻末には収録文書の解説（執筆は本末関係Ⅱ村上直、寺院行事関係・信仰関係Ⅱ馬場憲一）を記し、文書の内容が理解されるように配慮している。

江戸時代の本末組織は、江戸幕府の強力な宗教統制の下に、宗義的な結合を基幹としながら地方的な本末組織が成立したとみることがができる。元禄期になると寺院はすべて本末関係に組み入れられ、末端の末寺から小本寺、中本寺と層序を重ねて本山に至る寺院体系が制度化されたのである。高尾山薬王院も、こうした過程のなかで本寺（薬王院）―末寺関係も明確になるが、近世的な寺院の性格を明らかにしていくための貴重な史料が第二巻には数多く収められている。

なお、第二巻の調査団の構成は、委員に村上直（団長）・関口恒雄・安岡昭男・段木一行の四教授と馬場憲一講師、調査員は河野朝子・新城美恵子（本学大学院修了）・竹内総子（元本学聴講生）・平沢信子（本学大学院修了）・堀田トヨ（本学通教卒業）・真野みつ子・光石知恵子の七氏である。それに事務局には長谷川重夫氏が当たられた。

薬王院文書は、次の第三巻をもって、一応完了することになっている。この薬王院文書の解明によって、寺院関係の研究が促進されることを大いに期待したい。

（文責・村上直）

『高尾山薬王院文書』第一巻の刊行

【会員編著書抄】

村上 直共編

『藩史大事典』中国・四国編 雄山閣 平成二

『藩史大事典』史料・文献総覧・索引 雄山閣 平成二

『徳川家康事典』 新人物往来社 平成二

村上 直編

『日本海地域史研究』第一〇輯 文献出版 平成二

『日本海地域史研究』第一輯 文献出版 平成二

齊藤 勉著

『地下秘密工場中島飛行機浅川工場』 のんぶる舎 平成二

新藤東洋男著

『甲斐路の夜明け——「信玄旗掛松事件」』 創研出版 平成二

とその社会的背景——』